

【資料紹介】

石峯寺境内出土の銅板製鍍金経筒

－ 保存処理作業報告 －

阿部 功

石峯寺は、神戸市北区淡河町に所在する神戸市内有数の古刹として知られる。数々の貴重な文化財が伝来しており、境内の各所からは、過去に複数の考古資料が出土している。当館蔵の銅板製鍍金経筒もその一つであり、令和 2 年度に実施した保存処理作業の結果、往時の黄金の輝きを取り戻した。本稿は保存処理作業を通じて得ることができた、数多くの知見について報告を行うものである。

1. はじめに

神戸市北区淡河町^{みかげ}神影に所在する石峯寺は、山号を岩嶺山と号する。寺に伝わる縁起では、白雉 2 年（651）に法道仙人という伝説上の人物が開基したと伝わる神戸市内有数の古刹である。

境内には、薬師堂と三重塔（共に国指定重要文化財）、暦応 4 年（1341）建立の石造五輪塔（兵庫県指定重要有形文化財）などが現存しており、鰐口（兵庫県指定重要有形文化財）や絹本著色釈迦三尊画像、木造薬師如来坐像（共に神戸市指定文化財）をはじめとする、貴重な文化財の数々が伝来している。また、石峯寺及びその周辺は、神戸市文化環境保存区域に指定されており、その静かな佇まいと景観の保全が図られている⁽¹⁾。

2. 石峯寺境内からの出土遺物

これまでに石峯寺境内では、複数の地点から遺物の出土が伝えられ、太田陸郎氏⁽²⁾、景山春樹氏⁽³⁾による報告が知られる。出土したとされる考古資料は、現在石峯寺に伝来する一群と昭和 57 年（1982）度に当館所蔵となった一群がある。後者には、本報告の銅板製鍍金経筒及び経筒内に収められていた「法華経卷五」残片、丹波焼瓜蝶鳥刻文壺、陶製五輪塔などがある。これらの資料とその出土地点とされる 2 地点（図 2 - A：本堂西側の小山、B：三重塔北側の山頂、通称竜ヶ峰）については、昭和 61 年度からの 3 か年で当館において総合調査を実施した。この調査の過程で、これまで石峯寺境内出土と伝えられていた当館蔵の考古資料の一群には、「伝

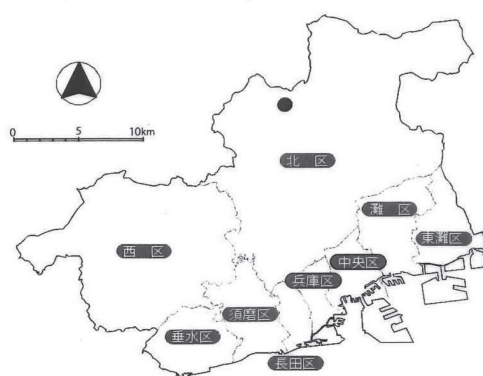
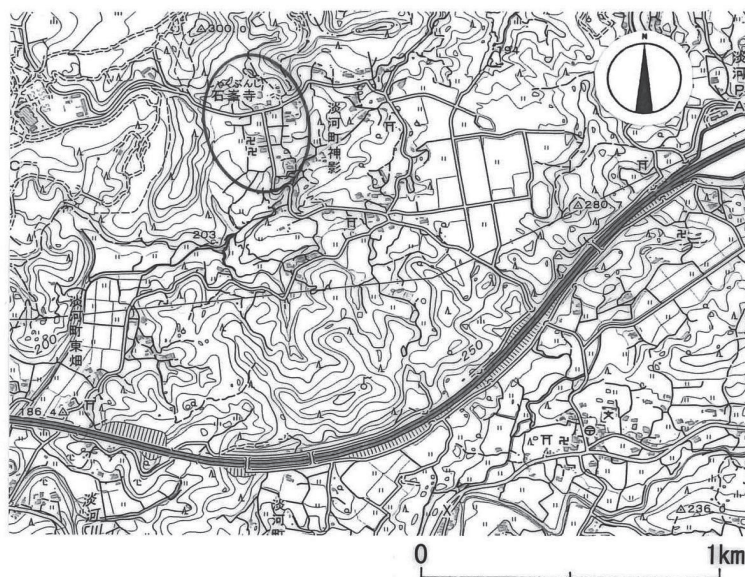


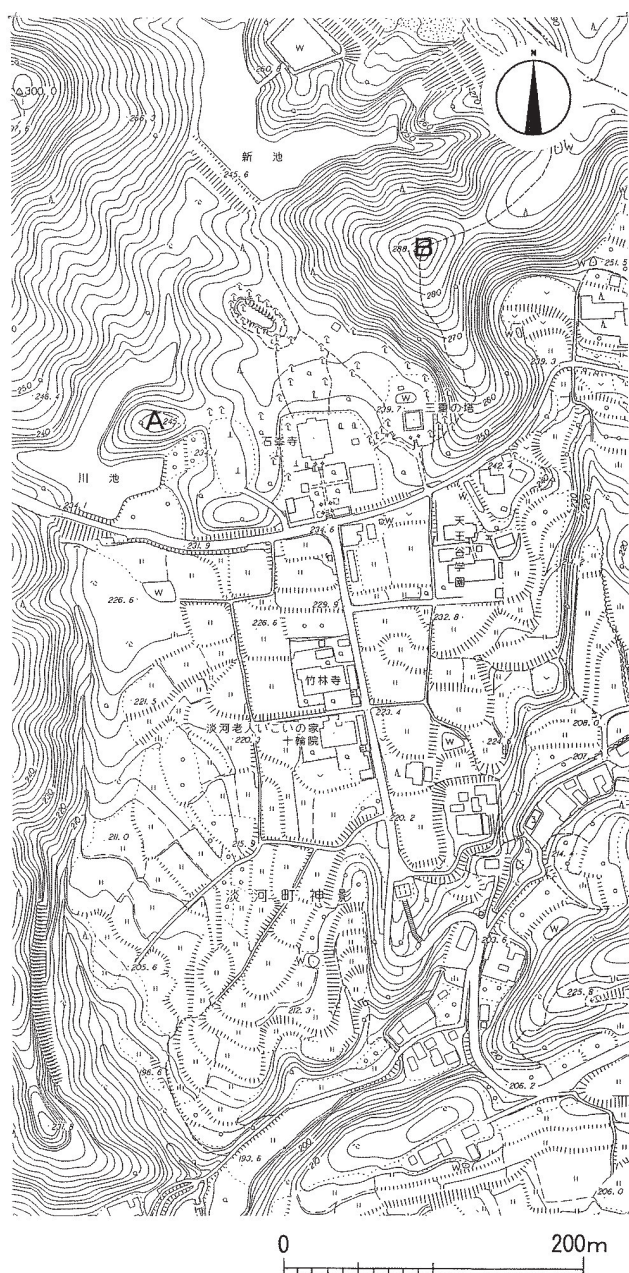
図1 石峯寺の位置



国土地理院発行の2万5千分1地形図「有馬」に一部加筆

福岡県内経塚出土」と「出土地不明」の資料が含まれることが明らかになった⁽⁴⁾。

A地点から丹波焼瓜蝶鳥刻文壺、陶製五輪塔とともに出土したとされている銅板製鍍金経筒については、これまで修復作業が実施できていなかった。令和2年(2020)度に経筒表面に固着した錆や土砂の除去などを目的とした保存処理を実施し、その過程で多くの知見を得ることができた。本稿ではこの保存処理作業を通じて判明した内容について報告する。



神戸市発行の2千5百分1地形図「石峯寺」に一部加筆

図2 石峯寺付近平面図

3. 銅板製鍍金経筒の現在までの経緯

まず、これまでに判明していた経緯をまとめてみる。

① 太田陸郎氏による紹介(昭和11年)

「近年本堂側の墓地を整理中に骨壺とともに発掘された」もので、「経筒底部其他破損が甚だしい(中略)極薄手の銅板鍍金で傘蓋式」で、内部には「粉状の紙片が少量残されている」と紹介されている⁽⁵⁾。写真図版や図等はない。森田稔氏が指摘⁽⁶⁾しているように、紹介された経筒が本資料に該当するとすれば、昭和初期頃に出土したことになる。

② 景山春樹氏による報告(昭和29年)

先の太田氏による紹介に関連すると思われる記述⁽⁷⁾がある。これは当館蔵の陶製五輪塔に関すると考えられる記述の中にあるもので、昭和28年夏に景山氏が石峯寺を訪れた際に聞いた「寺の思い出話」として、昭和9年に「本堂に近い墓地附近に在る一経塚」から陶製五輪塔が「出土したものであろう」とされ、「此処からその当時須恵器の壺や銅製経筒も伴出したように思う」というものである。出土したとされる時期と「本堂に近い墓地附近からの出土」という出土地点に、太田氏の紹介文との共通点が認められる。

③ 景山春樹氏による報告(昭和32年)

②の3年後に発表された報告⁽⁸⁾の中で、経筒と経巻が他の石峯寺境内出土とされる経塚関連資料を所有する個人コレクターによって入手された状況と、経筒についての観察報告が記述されている。文中には「最近(中略)入手されることとなり」とあるので、個人コレクターが入手する前に景山氏は修理前の経筒を観察したようである。

以上の経緯を経て、経筒には個人コレクターによって時期は不明ながら木芯に巻き付けるような状態での補修が行われたとみられる。その後の昭和57年度に当館の所蔵となる。以後、今回の保存処理まで具体的な保存のための処置は行われていなかった。

4. 銅板製鍍金経筒の保存処理

銅板製鍍金経筒の保存処理前の状況は、表面全体が錆に覆われて土砂が固着している状況であり、わずかに隙間から鍍金が確認できる状況であった。

経筒は、現存高が23.8cm、筒身径は6.8cmを測る。蓋は被蓋式の傘蓋に分類され⁽⁹⁾、高さ3.8cm、傘蓋径8.5cmである。蓋の中央に高さ1.8cm、径2.4cmの胴張りのある円柱状のつまみを有する。底部は失われており、形状は不明で木製台が後補されている。

発見当時から全体に損傷が甚だしく、当館蔵となる以前の段階ですでに修理が実施されていた。修理以前の写真が前述した昭和32年発表の景山春樹氏の報告文に掲載されている⁽¹⁰⁾。この写真では、経筒の中央部や底部が大きく破断しており、底には正方形の板が添えられて板の上で直立している。自立しているのか、内部に支え等が施されているのかは写真からでは判然としない。経筒の右側には、塊状になった経巻残塊が立てられた状況で写っている。この写真から、少なくとも景山氏の報告文にある「最近に至り重ねて同経塚の出土品だと伝える若干の資料について、知見を得る機会に恵まれた」時期には、修理は行われていなかったことが確認できる。なお、景山氏による観察では、「蓋のつまみも打出しで一寸変わった形」で、「極めてうすい銅板で造られたものであって、鑄造ではなく銅板を曲げて鋳止めしたもの」とされている。

今回の保存処理前の状況では、底部にくり込みの装飾を施した円柱状の木材を芯として、経筒を固定している状況が破断した部分から観察できていた。蓋と筒身は錆によって固着しており、経筒や蓋の内部の様子は不明な状況となっていた。このような状況の中で、銅板製鍍金経筒の保存処理作業の早急な実施は課題であった。

以下、保存処理作業の概要は、今回の作業を委託したパリノ・サーヴェイ株式会社の保存処理作業報告書に基づいて記述する。

5. 保存処理作業の実施内容

(1) 保存処理前の現状確認

経筒の保存処理作業を行う前に写真撮影を実施するとともに、本来の形状や内部の状況、構造の把握のためにX線透過撮影を行った。撮影は電圧が70～160kV、電流が3.0～4.0mA、照射時間が30～60秒間、照射距離が1.0～1.5mという条件の範囲内で行った。

X線透過撮影の結果、当館蔵となる以前に施された補修により、円柱状の木芯が筒身内部の3/4程度まで入っている状況が判明した。また、経筒は木芯に巻き付けるような状態によって形状を保っており、筒身は全体に亀裂が入った極めて脆弱な状態であった。このため、当初予定していた蓋と筒身の取り外し、および木芯からの筒部の分離は不可能であり、蓋や筒身内部の観察は断念せざるを得なかった。

そこで、保存処理方法についての再検討を行い、今回に関しては経筒表面の錆と土砂の除去、欠損部分への樹脂充填による補修を主な作業として実施した。なお、通常の保存処理作業で行われる減圧含浸による脱塩や樹脂含浸は困難な状況であり、以下の方法で処理を実施した。

(2) 処理工程

① クリーニング

経筒の錆と固着した土砂は、メス・ニッパー



写真1 保存処理作業前の状況

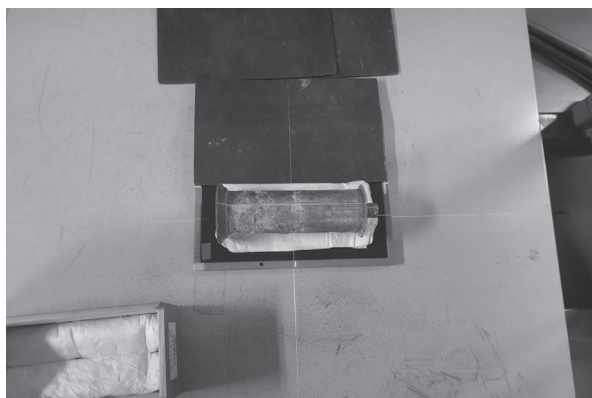


写真2 保存処理作業前の状況

などを用いて除去し、表面処理にアクリル樹脂（品名：パラロイド B-72）を筆などで塗布した。

② 接合・樹脂充填

筒身の欠損部分については、エポキシ系樹脂（品名：ボンド クイック5）を充填して破断面を保護した。過去の補修では、木芯への固定などに接着剤（性質は不明）を厚く塗布しており、一部がはみ出して固着していた。エポキシ系樹脂を充填した欠損部分と周囲に違和感が生じないように画材（アクリル絵の具 ACRYL GOUACHE、一部金箔を使用）を用いて補彩を施した。

③ 記録作成と納品

処理後の経筒は、撮影写真と記録をまとめた保存処理作業報告書と共に、令和3年3月26日に納品された。



（上：充填前、下：充填後）

写真3 欠損部分の樹脂充填と補修

（以上3点写真提供：パリノ・サーヴェイ株式会社）

6. 保存処理で判明した経筒の構造

今回実施した保存処理作業、およびこれに伴うX線透過写真撮影により、経筒表面全面に良好な状態で鍍金が遺在していることが確認された⁽¹¹⁾。さらにこれまでに知られていなかった経筒の内容や構造が明らかとなった。

(1) 蓋

被蓋式の傘蓋に分類されることが判明していたが、極めて薄い銅板で製作されていることが確認できた。筒身への被せ部となる環状の筒形の部材に、傘の部品を組み合わせる蓋を構成しており、傘の上半部には円盤状の板3枚を重ねている。傘の端部は外方へややね上がるような形状である。

前述したように、蓋と筒身との分離が不可能であったため、X線透過写真による内部観察を行った。傘と環状の筒形部材の接合方法は判然としない。また、傘を構成する円盤3枚のうち、いずれかには中心点を対称とした不整形な孔が開けられていることが判る。つまみ内部中央に固定した割ピン状の鉾との関係は明確にできていないが、傘内部中央において、割ピンの脚を開くことによって、4点で構成された傘の部材を固定しているように観察できる。

傘の表面には魚子状に細かな円形の打刻を行い、八弁の蓮華文を刻んでいる。花卉には8本の縦線による脈の表現がある。傘に重なる3枚の板表面には、放射状の刻みが施されている。つまみ表面には側面に縦方向の線刻を施し、頂部の端に円形の線刻を巡らした中に、花卉に対応する打刻を8ヶ所に施して花托を表現している。つまみ頂部の中央がやや高く外方へ緩やかな斜面を持つ。

(2) 筒身

筒身は極めて薄い銅板を円筒形に丸めて、端部を5mm程度重ねて5本の鉾で留めている。鉾の形状は頭が丸く、先端は割ピン状を呈する。筒身の下半部は大きく損壊して内部の木芯が見えている。表面観察とX線透過写真では、筒全体に亀裂が入り非常に脆い状態が確認でき、木

芯に巻き付けて固定することによって、かろうじて形状を保っていることが判明した。

なお、筒身表面に陰刻や墨書などによる銘文は確認されなかった。

(3) 底部

底部は失われて本来の形状は不明である。前述した景山春樹氏による、昭和32年の報告文⁽¹²⁾の写真では、底部が一部損壊している状況が認められる。現状からは外側から底板をはめ込む形状も想定できるが、確定はできない。X線透過写真による観察では、筒身の底部端面は平坦ではなく波打つような形状が確認でき、腐朽によって本来の形状が失われている可能性も想定される。鋳留などのための孔などは確認できない。

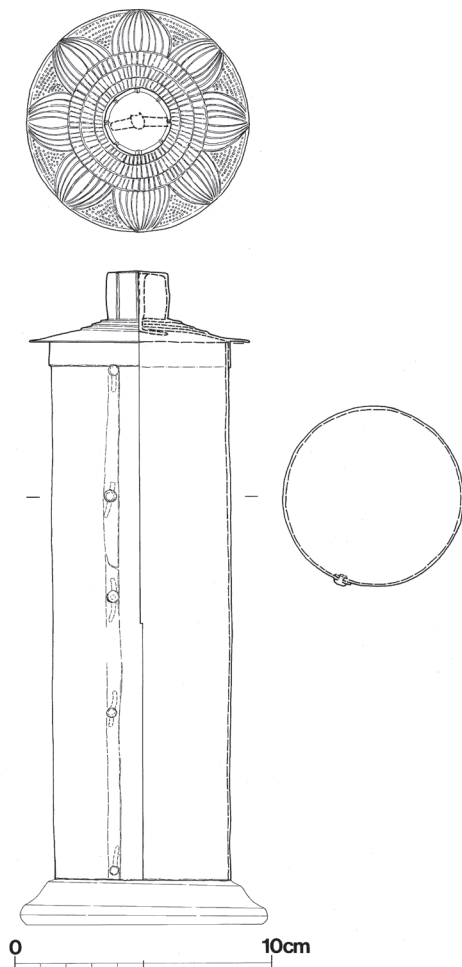


図3 経筒実測図

7. 石峯寺境内出土銅板製鍍金経筒の位置づけ

これまでに神戸市内から出土した鍍金経筒には、吉尾経塚（北区八多町吉尾）、名谷経塚（垂水区名谷町）⁽¹²⁾、勝雄経塚（北区淡河町勝雄）の経筒が知られている。

吉尾経塚出土経筒と名谷経塚出土経筒は、共に現在は東京国立博物館に所蔵されている⁽¹³⁾。陶製の外容器に収められており、銅板製打物である。吉尾経塚では経筒の蓋は失われているが、名谷経塚の経筒は被蓋式の平蓋である。底部は共に平底系で、外側から筒身へ底板を被せるようにはめ込んでいる。共に筒身外面に陰刻の銘文を持つが、年号は含まれていない。吉尾経塚は「下總国覺蔵坊」、名谷経塚は「駿河月照上人」により埋納されたものと考えられる。両者は複数の銅銭を伴う点も共通している。

勝雄経塚は、山陽自動車道建設に伴う勝雄城跡の確認調査で発見されたもので、淡河盆地の南端部、神戸市と三木市境の標高194mの細長く急峻な尾根上に営まれていた。経筒は陶製壺内部に木蓋をして収められ、経筒内部には法華経八巻がほぼ完全な状態で遺存していた⁽¹⁴⁾。

勝雄経塚から出土した経筒は、表面全体に施された鍍金が良好に遺存していた。蓋は被蓋式の盛蓋に分類されるものと考えられる。蓋表面に魚子状に細かな円形を打刻し、横位の蓮華文3ヶ所とその周囲に唐草文を浮き彫りにしている。蓋中央の方形露盤の上部に八弁の受花・宝珠で構成されるつまみが乗り、つまみは内部に固定した割ピン状の鋳で蓋本体に固定している。

また、蓋表面に魚子状の円形打刻と横位の蓮華文を配する意匠は、石峯寺境内出土経筒との共通性が指摘でき、つまみと蓋本体の固定に割ピン状の鋳を用いる点も製作技法上の共通性が認められる。しかし、石峯寺境内出土経筒は蓋の表面に円盤状の板材3点を固定するが、勝雄経塚出土経筒では方形露盤という点に差異がある。

筒身は銅板を丸めて、合わせ目を3か所の舌をはめ込んで固定している。底部は平底系

で、外側から筒へ底板を被せるようにはめ込む。筒身の表面には陰刻の銘文があり、享禄3年（1530）に「播磨住良円」により納められたとみられる。

以上3点の経筒は、筒身表面に陰刻された銘文からいずれも六十六部廻国納経に伴うことが共通する⁽¹⁵⁾。石峯寺境内出土経筒は、経筒表面に銘文が存在せず、納められた「法華経卷五」に年号や人物名の記載がないため、どのような目的を持って埋納されたのかは不明であると言わざるを得ない。現状からは、銅板製鍍金経筒が出土したとされる本堂西側の小山付近において、本経筒などを埋納した経塚（平安時代末～鎌倉時代、12世紀末～13世紀頃）が、納骨墓群に先立ち造営されたとする意見⁽¹⁶⁾を支持したい。

8. おわりに

石峯寺境内では、複数の地点において遺物が出土しており、多くの考古資料が伝来している。しかし、その多くは発掘調査に伴うものではなく、今なお出土地が特定できていない資料が存在する現状がある。

このような中、銅板製鍍金経筒は概ね出土地点が判明しており、今回の保存処理作業を通じて得ることができた情報は、今後の経筒研究に多くのデータを提供できるものと考えている。石峯寺境内所在の経塚群の全体的な様相や性格、銅板製鍍金経筒の割ピン状の鉾による各部の接合例や複数の部材を組み合わせる蓋の製作技術など、今回明らかにすることができなかった問題は、今後の課題としたい。

謝辞

本稿の作成には、下記の機関・方々に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

パリオ・サーヴェイ株式会社、神戸市文化スポーツ局文化財課

谷正俊、中谷正、中村大介、橋詰清孝、東喜代秀

【註】

- (1) 財団法人文化財建造物保存技術協会編『神戸市文化環境保存区域内 石峯寺本堂保存修理工事報告書』（石峯寺、1989）
- (2) ①太田陸郎「石峯寺記録」『兵庫史談』第5巻第3号（神戸史談会、1936）②森田稔「石峯寺経塚」遺物の再検討『神戸市立博物館研究紀要』第8号（1991）
- (3) ①景山春樹「播磨石峯寺経塚遺宝について」『大和文化研究』第2巻第6号（大和文化研究会、1954）②景山春樹「播磨石峯寺経塚遺宝拾遺」『考古学雑誌』第42第4号（日本考古学会、1957）
- (4) 前掲（2）②
- (5) 前掲（2）①
- (6) 前掲（2）②
- (7) 前掲（3）①
- (8) 前掲（3）②
- (9) 経筒各部の名称・分類は下記に準拠した。時枝務「経塚遺物と伝世品」『美術史と考古学』（雄山閣、2021）
- (10) 前掲（3）②44頁
- (11) 銅板製鍍金経筒の実測・製図・写真撮影は、当館学芸課 山本雅和が行った。
- (12) 前掲（3）②
- (13) 東京国立博物館 市元墨氏にご教示いただいた。
①東京国立博物館編集・発行『東京国立博物館図版目録 経塚遺物篇』（1967）②東京国立博物館編集・発行『東京国立博物館図版目録 経塚遺物篇（西日本）新訂』（2018）
- (14) 山下史朗・松岡千寿編『兵庫県文化財調査報告第158冊 勝雄経塚－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X V－』（兵庫県教育委員会、1997）
- (15) 六十六部廻国納経については下記を参考にした。
①関秀夫『日本の美術9 経塚とその遺物』（至文堂、1990）②松岡千寿「六十六部廻国納経について」『兵庫県文化財調査報告第158冊 勝雄経塚－山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X X V－』（兵庫県教育委員会、1997）
- (16) 前掲（2）②